

船井幸雄 十太田龍

日本人が知らない 人類支配者の正体

日本を代表する碩学二人が「デーヴィッド・アイクが突き止めた大いなる秘密」を考察！
「世界の本当のしくみ」を知るための必読書!!



SAMPLE



005

日本人が知らない「人類支配者」の正体

船井幸雄
太田龍

ヒカルランド

SAMPLE

文庫版序文　なぜいまデーヴィッド・アイクなのか!?

船井幸雄

本当に惜しい人を亡くしました。それは本書で私と対談している太田龍さんのことです。頭脳明晰で、頭の回転が速く、なによりもタブーを恐れない勇気を持った人でした。日本で代われる人のいない、人間研究の指折りの知識人だったと思います。

本書は太田龍さんと私の初の対談集です。この本で語りつくせなかったことがお互いにもまだたくさん残されていたので、いづれ対談本の第2弾で、再び太田龍さんとあいまみえるときがくるのを心待ちにしていた矢先の訃報でした。

太田さんが追求してきたこと、そのジャンルは多岐にわたりますが、この本で彼はデーヴィッド・アイクの著作からヒントを得て、異星の知性体の人類への関与というアカデミズムが真つ向から否定する要素を果敢に取りあげて、白人の歴史をして日本の歴史に新たな光を当て彼が知ったことを熱く語ってくれました。それが彼の晩年の最も大きなテーマ

となりました。

またその観点から西洋医療というものの起源、成り立ち、構造にも疑問の目をむけ、厳しい批判を繰り返していたことを懐かしく思い出します。太田さんは、西洋医療の延命策はもちろん、そのすべてを受け入れることを拒否していました。体調を崩した太田さんは、多くの人の勧めにもかかわらず、病院にはほとんど足を運ばなかったようです。あの時は肺に水がたまっていたのではないか、それを抜けばもっと生きられたはずだと言う人がいます。しかし、彼は自らの信念に沿って、断固とした態度で、自らの手で天寿を全うしたのです。すばらしい死に方というのがあるとすれば、それは太田さんの逝き方とも言えます。そんなことを教えてくれた太田龍さんにこの場を借りて感謝を捧げたいと思います。

さて、この本『日本人が知らない「人類支配者」の正体』は2007年にビジネス社から刊行されたものです。このたび、ヒカルランドが文庫創刊に当たって、本書をいの一冊に取りあげた、その真意はどこにあるのでしょうか。それを私なりに解釈すると、どうやら時代はデーヴィッド・アイクのような見方、考え方を切に求めているようになったのではないかと思えます。

40余年間コンサルタント業を続ける中で、「世の中のしくみ」が本当はどうなっている

す。

しかし「聖書の暗号」にもそのような存在のことは、出て来るのです。しかも「愛のコード」では、「闇の権力の本隊は、90年代後半に自ら納得して地球域から去った」と読めるのです。

今月、1冊の私の本が発刊されます。それは今月20日ごろに海竜社から出る『本物の生き方』という題名になります。サブタイトルは、「地震・津波・放射能のトリプルピンチも、これで乗り越えよう」です。

この本の原稿を書くために、私なりに地球人類の歴史を分る範囲で調べなおしました。私は多くの人から、人類の歴史を学びましたが、もともと論理的で検証もされており、「まさか?」と思いつながら「なるほど」と最大限に納得したのは、故人になられた太田龍さんの考え方でした。

彼とは『日本人が知らない「人類支配者」の正体』（2007年10月 ビジネス社刊）という共著を出したのですが、初対面で「船井さん、あなたは爬虫類はちゆうるい的異星人のことを少しは勉強されましたか?」とまず聞かれました。

ちようどグラハム・ハンコックさんやエハン・デラヴィさんから話を聞いてそれらのことに興味があった時でしたし、デーヴィッド・アイクさんの『ザ・ビッグゲスト・シークレ

『邦訳『大なる秘密 上下巻』2000年8月・10月 三交社刊)も一読したあとだったのです。そこで「興味があるが、分りません」と答えた記憶が残っています。

そして、でき上がった対談本が前述の本なのですが、今度新著の原稿を書いて、「闇の勢力」と、この爬虫類的異星人(レプティリアン)が重なって考えられて仕方がなかったのです。

そこで久しぶりに太田さんとの共著を読み返しました。自分で話したことを書いた本ですから、当然ですが、びっくりするほど、新鮮でよく分るのです。

そこで脱稿後、太田さんの最高傑作といわれる『地球の支配者は爬虫類的異星人である』(2007年9月 成甲書房刊)を入手して読みました。いま、そこに書かれていることを検証中ですが。太田さんが亡くなりたいま、彼に聞くのは不可能ですが、びっくりするほど詳しく検証されています。

しかも日本に人工地震で攻撃を仕掛けたと言われる悪魔教のこととも符合するのです。彼らは人類ではない……彼らの幹部は人間であっても非情の知的異星人の血族たちだと考えると納得もできます。

したがって、この連休が終わったら、ぜひ、まず太田さんと私の共著、そして興味のある方はレプティリアンのことを書いた太田さんの前記の著書やデーヴィッド・アイク

シッチン説では、彼らは45万年前（二十数万年前という文献もあり）もの遙か（はる）彼方の時代に、地球にやって来たと言われています。その目的はゴールド（金）採鉱ということですが。

惑星ニビルは惑星周囲の保護膜が消えかかっており、そのためにアヌンナキは絶滅の危機にありました。その保護膜を補修するためのゴールドがどうしても必要だったので。

辛い地球はゴールドの宝庫だったようです。しかし、宇宙人のアヌンナキにとっては地球環境そのものが過酷であったばかりか、ゴールドの採鉱労働そのものも辛いものであったようです。あるときアヌンナキ内の採鉱者の反乱が起きました。その解決策として、奴隷労働用の生物ロボットを作ることになったのですが、それによって誕生したのが地球人類であるという説です。

アヌンナキの遺伝子を使って作られた人類はこうして増えていきました。しかし、アヌンナキの中にも派閥があって、人類が増殖していくことを快く思わないグループもいたようです。

ある時、地球に天変地異が起ることを察知したアヌンナキは、いったん地球外に去って避難することになりました。これが大洪水の神話として残されていると言われているものようです。その時、人類は滅びるに任せようという決定がなされたのですが、あるアヌンナキはそれを忍びなく思い、人類の一部に生き延びるように方策を授けました。これ

がノアの神話として残されているものだとされています。

大洪水のあと、壊滅的な打撃を受けた中近東地域に、避難していたアムンナキがもどつてきた時、生き延びた人類を目標としてびっくりしたようです。しかし、これから文明を再興するために人類の労働力は必要不可欠であると判断したアムンナキは、人類とともに文明再建に取り組んだということです。それがシュメールから始まるメソポタミア、エジプト、インダス、黄河の四大文明という説です。

デーヴィッド・アイクさんは、彼らアムンナキは次第に人類の前から姿を隠し、陰から秘密裏に人類を監視するようになったといっています。それがアイクさんの言う爬虫類人（レプティリアン）とも関係がありそうです。そのレプティリアンの地球支配が、世にいう秘密結社の奥の院なのだというわけです。

太田龍さんの『縄文日本文明一万五千年史序論』（成甲書房刊）の骨子も、まさにこのことを述べたものです。人類の歴史はヒッタイト、アリア、コーカサス、フェニキア、韃靼^{だたん}まで、すべてはアムンナキ異星人、そしてレプティリアンの地球支配の血塗られた歴史そのものだと彼は言います。私は、まだ研究中ですが、その可能性は高いと思っています。

ただ唯一、異星人の影響から免れて、ある地球原住民がスクスクと成長・向上して、地球生物全体社会での生え抜きの人類文明を構築していたというのです。それが日本の縄文、神代であったと太田さんは言うのです。面白い説です。これは、とても参考になります。

(中略)

ともかく、縄文人とは、アヌンナキともレプティリアンとも無関係の聖地での人類の独自の文化を創ったようだ……と私も思っています。もし存在していたとすればムーのよい思想だけが、少しだけ入っていたかもしれないような気がします。(中略)

私は「日月神示」に興味を持っていますが、そこに出てくる神様たちは、超高度な文明やテクノロジーをもったアヌンナキや爬虫類人とは異なった地球の正統派存在だと思っています。日本神話にも日月神示にも宇宙人の存在は出てきません。ところが、シユメールや聖書、ヒンズーの文献などでは、その語源を突き詰めていくと、宇宙飛行士だったり、ロケットや宇宙船だったり、異星人の存在とリンクする語彙ごいがいっぱいなのです。

一方、日月神示には天人、天使、霊人という多次元の存在が出てきます。それはどうも宇宙人というより、宇宙の正統知性そのものが一群の形として現われた存在のように思え

るのです。

|||||

われわれを支配するレプティリアン(?) (2006年10月27日)

私の友人にエハン・デラヴィイさんがいます。奥さんが日本人で関西弁が巧みです。

彼は1952年にスコットランドで生まれた人で、作家で冒険家で、真理研究者です。

著書に『マーキング・ポイント』(日本教文社刊)、『太陽の暗号』(三五館刊)、『キリストとテンプル騎士団』(明窓出版刊)などがある人ですが、先日彼と話していた時に、私が影響を受けた2人の人の名前が出てきました。

1人はグラハム・ハンコックさん。『神々の指紋』で有名な考古学研究家で、私とは雑誌『evah』の創刊号(1996年11月1日、サンマーク出版刊)誌上で、対談したなつかしい人です。

彼はエハンさんと親しく、来月には訪日の予定ということでした。後の1人は最近、惹かれていたデーヴィッド・アイクさんで、この人もエハンさんの友人のようです。仲よく撮った写真を見せてくれました。

このアイクさんは、やはり1952年に英国のレイチェスターに生まれた人で、プロサッカーの選手などを経て、テレビキャスターとして有名になった人です。彼を転身させたのは、ベティ・シャインさんとの出会いらしいのですが、私もベティ・シャインさんが大好きなので不思議な縁を感じていました。

ところで、デーヴィッド・アイクさんは、1999年にイギリスの BRIDGE of LOVE PUBLICATIONS という出版社から、“THE BIGGEST SECRET” という本を出しました。この本は2000年に太田龍さんの訳で三交社から『大いなる秘密』（上・下巻）として日本語版が出版されました。

一読して、「そんなことがあるだろうか？」と思ったのですが、最近多くの人から、この本のことについて質問を受けます。それは中丸薫さんが今年8月に『この地球を支配する闇権力のパラダイム』（徳間書店刊）内に紹介したことにもよると思うのです。

そこで、9月〜10月にわたって私はこの本を読み返しました。先週ようやく読み終わったのですが、「ここに書かれていることは正しいかもしれない」と、いまは思っています。ともかく、ぜひ皆さんにも、目次だけでも知っておいてほしいのです。以下は太田龍さん訳の上巻の序章から12章と下巻の1章から9章の目次です。

【上巻】

序 章…決断すべき黎明の秋——靈的に覚醒し、「家畜人」「奴隸人間」からの脱却を！

第1章…やって来た火星入——異星人の遺伝子操作で人類は創造されたのか!?

第2章…驚愕の目撃例——「その爬虫類人のことを口にするな！」

第3章…地球を蹂躪する異星人——バビロニアン・ブラザーフッドは歴史にどんな罖を仕掛けたのか？

第4章…神の子なる悪の太陽神たち——秘教の象徴体系を狡猾に操作、人類を精神地獄に

第5章…血の十字架を掲げた征服——「善男善女」の多次元宇宙意識への秘儀参入は断じて許さない！

第6章…浸潤する「黒い貴族」——フェニキア、ヴェネチアそして「英国を完全に支配せよ！」

第7章…跳梁席卷する太陽の騎士団——象徴、儀式、エナジー・グリッド、黒魔術で眩惑する

第8章…一つの顔、さまざまな魔の仮面——宗教と科学を韜晦、「レプティリアン・

「アジエンダ」は必ず実現させる！

第9章…呪われた自由の大地——コロンブス以前から、ブラザーフッドはアメリカを凌辱してきた

第10章…無から捏造した金——「慈悲深き聖都の騎士団」末裔（ロスチャイルドラ）の無慈悲な錬金妖術を剔抉する

第11章…眩しのグローバル・バビロン——英米ブラザーフッド・エリートは両大戦でグローバル・マニピュレーション世界全支配を完遂へ！

第12章…逆光するブラック・サン——鉤十字の世界支配計画は、今やグローバルに堂々遂行されている！

【下巻】

第1章…爬虫類人の冷酷な位階網——RIIA、CFR、TC、ビルダーバーググループ、ローマクラブなどの巨悪を暴く！

第2章…高貴なる麻薬の売人ども——イギリス王室・東インド会社・香港上海銀行の悪魔的所業を知れ！

第3章…聖なる瀆神強姦殺人儀式——古代バビロン・イルミナティ・悪魔教など黒

魔術式拷問は爬虫類人の生命栄養補給源

第4章…恍惚のうちに壊されるアメリカ——小児性愛的倒錯症の前米国大統領、幼児

への愛情爆撃・MKU・性的虐待・誘拐…

第5章…「死と破壊」地獄を招く象徴言語——自由の女神、万物を見通す目、不死鳥、

五芒星…新世界秩序によるこそ！

第6章…「トカゲ」女王陛下の邪悪な連鎖——黒い貴族の血流は武器・麻薬密売、不

正投機…テロ・大量虐殺に手を染める！

第7章…「月の女神」の残酷な生贄——ダイアナ妃をその美と愛ゆえに、周到かつ黒

魔術的に殺害した卑劣な手口を告発！

第8章…「振動仕掛け」呪縛の構造——爬虫類人の人類支配の欺瞞的常套手段は、恐

怖と憎悪に共振させると見抜け！

第9章…呪縛牢獄からのさわやかな解放——速くて短い愛の波長は、孤独・暴力のレ

プティリアン世界を変容一新させる！

ともかく99%の人は、少し読むだけでびっくりすると思います。私も「本当かも知れない」と言っていますが読んでびっくりしました。なぜなら「われわれは爬虫類人に支配され

ている」ということを書いていますし、具体的な変身の例が多くできましますし、証言も出てくるからです。

ただし同書のはじめにデーヴィッド・アイクさんは、警告として次のように言っています。太田さんの訳文をそのまま転載します。

警告！

本書のなかには、一般の常識からはあまりに掛け離れた情報が大量に収められている。

だから、あなたがあくまでも既存の常識のうえに立とうとするのなら、この本を読むのをやめてもらってもいい。また、「世界のこの現実を直視することに耐えられない」と言う人も、この本を閉じてもらってもいっこうにかまわない。

ただ、もしもあなたがこの本を読むことを選択したのなら、どうか次のことを覚えておいていただきたい。

生命いのちは永遠に続いて終わることがない。すべての事象は、生命が「光」へと向かう途上での経験なのだ。至高のレベルから見れば、この世には善も悪も存在しない。自らの選択によって経験を積み重ねてゆく意識のみがただ存在している。この本

が明らかにする数々の驚くべきできごととは、「光輝く自由の夜明け」へと向かうプロセスの一部なのだ。

どうか気づいていただきたい、二万六千年来の「大いなる意識変革の時」が近づいていることを。そして、これからあなたが知ることになる数多くの深刻な情報にもかかわらず、今ほど生きるのにすばらしい時代はないことを。(デーヴィッド・アイク)

ともかく、できれば読んで、びっくりし、いろいろ考えてください。

どうぞでしょう。同書のことを知らなかった人は、まさにこの目次だけで「びっくり」しましょう。

さて、ここでヒカルランドさんからお願ひされた告知があります。

デーヴィッド・アイクの最新刊がこの超☆ぴかぴか文庫にて、刊行されるということです。この出版不況の時代に全10巻本として、発売するというのですから、気合が入っていますね。

『人類よ起ち上がれ！ ムーンマトリックス 覚醒篇①～⑦』『人類よ起ち上がれ！ ムーンマトリックス ゲームプラン篇①～③』の計10巻とのことですよ。

今回、太田龍さんの遺志を継いで、アイクさんの本の翻訳をしているのはなめきよかつひこ為清勝彦さんです。そこで彼の書いたまえがきをここに転載します。

本書は、2010年4月にイギリスで発行されたデーヴィッド・アイクの『人類よ、起ち上がれ——眠れる獅子が目覚めるとき』(Human Race Get Off Your Knees, The Lion Sleeps No More)』の翻訳である。原書は約七百頁の辞書のように分厚い一冊になっており、机に置いて読まなければ手が疲れるほど重い。この貴重な考察と情報の詰まった本を、日本の読者の皆様には、じっくりと快適に読み進めていただきたいという思いから、日本語版では全10巻に分冊し、手に取りやすい文庫版で出版することになった。

よく「世界の仕組みが分かる本」といったキャッチ・コピーで販売されている本があるが、その宣伝文句はまさに本書のためにある。決して誇大広告ではなく、この本を読めば、本当に世界の仕組みが分かる。もちろん、アイク自身が1990年以降、常に新しい事実を（正確に言えば、隠れている事実）を解明する旅を続けていると書いている通り、本書で全てが分かるわけではない。だが、少なくとも大半の読者の方にとって、まったく現在とは異なる世界認識をもたらすはずである。それも、ちよっ

とやそつと異なるのではなく、想像を絶した認識の変容をもたらすはずである。これ以上知りたくないとは拒絶したくなるほど世界の仕組みが分かる。

各巻の概要は、次の通りである。

【第1巻】我々は通常、自分の身体やものの考え方、自分の名前などをもって「自分」と思っているが、実はそれは錯覚であるということ（第1章）、そして、アイクが1990年に覚醒の旅を始めるまでに辿った人生経験の必然性（第2章）、覚醒の旅を始めて以降、世間から大々的に嘲笑されることで真の自由を得たこと（第3章）が記述されている。

【第2巻】第4章より、アイクが過去に行ってきた真実の解明の内容が、解明を行った順に（解明に導かれた順に）紹介してある。太古の「黄金の時代」の終焉をもたらした地殻変動（大洪水）の後にメソポタミアの地に出現したシュメール文明。それが、バビロン、エジプト、ローマ、ロンドン（バビロンドン）と変遷し、今日の世界支配ネットワークになった（第4章）。イルミナティの地球規模の蜘蛛の巣（ウェブ）、ピラミッド支配構造（第5章）。イルミナティの血筋の中核をなすロスチャイルド家とその金融支配の手法（第6章）。「ユダヤの陰謀」と言われるが、ユダヤ人はスケープ

ゴートに過ぎない。陰謀しているのはロスチャイルド・シオニストである（第7章）。

【第3巻】 人類支配の基本テクニクである①PRS（問題を作る↓人々に反応させる↓支配に都合の良い解決策を実施）、②全体主義者の忍び足について、911事件、地球温暖化詐欺などをケーススタディにして解説。

【第4巻】 人間の基本的な行動や感情を支配する爬虫類脳。現在の人類は爬虫類人の遺伝子操作によって創造された（第10章）。世界各地の古代神話・伝説・信仰に共通する蛇崇拜は、現在の悪魔崇拜や様々なシンボルとなって受け継がれている（第11章）。

【第5巻】 言語に暗号化されている蛇の人類支配を言語学の視点で分析（第12章）。

爬虫類人はどこにいるのか？（地下世界、変身のことなど）（第13章）。月は、自然の天体ではなく、工作された宇宙船である可能性を検証（第14章）。

【第6巻】 アマゾンの熱帯雨林で聞こえた「声」のメッセージ。愛だけが真実であり、他は何もかも錯覚だった（第15章）。人体をコンピュータに喩え、宇宙をインターネットに喩えるアイクの宇宙論（第16、17章）。時間と空間という錯覚（第18章）。

【第7巻】 月のマトリックス。月からの人類支配の仕組み（第19章）。

【第8巻】 ゲーム・プランⅠ（人口削減と心身への攻撃）

【第9巻】 ゲーム・プランⅡ（世界政府と自由の剝奪）

【第10巻】ゲーム・プランⅢ（社会福祉の正体）と結び

「訳者まえがき」と10巻までの説明を読むだけでも面白そうですね。興味のある人はぜひ手にとって見てください。ちょっと、こわいかも知れませんが。

楽しみにしています。早く全巻を読みたいものです。

そして、本書『日本人が知らない「人類支配者」の正体』の内容とも照合してみてください。さい。

現代世界の最高峰の「世の中のしくみ」を俯瞰ふかんすることになるのではないのでしょうか。

2011年8月吉日 熱海にて

はじめに

明治以降、無数のタブーが増殖して日本人の精神と魂を腐敗させた

船井幸雄さんとの対談を一冊の本にする過程で、私が得た最初の印象は、この人にはタブーがほとんどない、ということでした。タブーがないということは、自分の誤り、自分の欠陥、自分の限界、自分の無知をタブーとせず、それらを自力で修正し、乗り越えるべく常に努めることも意味します。

渡辺京二著『逝きし世の面影』（平凡社刊）に詳述されているように、江戸時代までの、すなわち明治以前の日本人の民族性は、まさにそのようなものでした。

しかし、慶応2年12月25日（西暦では1867年1月）、孝明天皇弑逆事件（しぎやく）とともに、日本は変質しました。つまり、それ以降、日本人にとってこの孝明天皇弑逆事件の真相を探究することは絶対のタブーとされ、そしてこの時点から無数のタブーが増殖して、日本

人の精神と魂を腐敗させるのです。

このタブーの呪縛じゆばくからの解放を志した拙著の『長州の天皇征伐』（成甲書房・2005年刊）を、公然と肯定的に論評されたのは、日本で船井幸雄さんが初めてです。

私は、平成19年8月2日、船井さんと対談した折、鹿島昇かしまのぼる著『裏切られた三人の天皇』（新国民出版社刊・2007年7月・第3版発行）をお渡ししました。そして、8月24日に、船井さんご自身のホームページ上に、この本のことを丁寧で紹介していただきました。私の知るかぎり、この記事は故鹿島昇著『裏切られた三人の天皇』についての最初の真剣な書評です。

船井さんと私の最初の接点は、デーヴィッド・アイクの『大いなる秘密』（上下2巻、三交社刊・2000年）でしょう。西洋には、我々日本人にとっては想像を絶するような秘密の暗黒世界が潜んでいます。英国の天才思想家デーヴィッド・アイクは、『ロボットの反乱』（1994年）、『真理はあなたを自由にする』（1995年）、『大いなる秘密』（1999年）、『マトリックスの子供たち』（2001年）などの著作で、無数のタブーと構造によって堅固に警備された、この秘密の暗黒世界を白日の下にさらけ出す大仕事をやってのけました。

私は、1995年以降、西洋6000年の歴史に初めて出現したこの天才アイクを日本

人に紹介するために努力して、ついに2000年、『大いなる秘密』日本語版が出版されたのですが、この本を高く評価して書評されたのも、船井さんが最初です。

西洋式「人類独尊」から日本的「万類共尊」への転換の時代

ところで、うしろ良のこんじん金神と名のる存在が2004年2月5日、船井さんが大本教の亀岡本部に連れて行った60人くらいのなかの一人の女性にかみがか神懸ったという一件は知りませんでした。これは明らかに神憑り、シャーマニズム的出来事ですが、私の知る限りこの現象は過去70年来の日本に、絶えて生じなかつた次元のものでしょうか。大本教の教団はこの良の金神の神憑りを認めていないそうですが、いかにもありそうなお話です。

2008年（子年）前後が世界のしやうねんば正念場という見方はそのとおりでしょう。そしてこれからは日本人中心にやるほかないということも。しかし、日本人中心というその「日本」の意味、その核心はなにかが問題です。

縄文以前の太古の時代から、日本人の精神性を一語で要約すると、「万類共尊」となります。これに反して西洋人の根本思想は、「人類独尊」です。人間中心主義、人間至上主義ともいいます。

1987年の時点で、西洋文明が独占独裁する地球上に於いて、人類は地球自然資源の限界を超えたといわれています。このまま突き進めば、西洋の自然破壊的科学技术と西洋式利己主義社会システムによって、地球の生態系は大崩壊するしかありません。

西洋式人類独尊から日本の万類共尊へ――。

人類は今、思想と宇宙観と制度を根本から転換するよう迫られているわけです。日本がまず、国家まるごと、民族まるごと、この転換を開始しえなければ、他にそれをできる国家民族は存在しません。もはや、人類の命運もこれまででしょう。

今日、船井さんとの対談を一冊の本にすることになって、いろいろと考えていくと、私はずいぶん前から、無意識のうちに船井さんとはご縁があったということに気づきました。

船井さんは1985年頃、経済学者の難波田春夫先生との出会いがあり、それを契機に「資本主義は間もなく崩壊する」と言い出した、と述べておられますが、ちょうどその頃、私も難波田春夫先生の学説に共鳴して講演をしていたことがあります。

船井さんと私とは、役割も経歴も異なりますが、深い根のところは一つの流れのなかにあります。

デーヴィッド・アイクの大著『マトリックスの子供たち』の日本語版が、この9月早々、

出版の運びとなりました（『竜であり蛇であるわれらが神々』上下2巻、約1000ページ。徳間書店刊）。さらに、10月にはアイクの新しい英文著作『グローバル・コンスピラシー——いかにしてそれらを終わらせるか』（『恐怖の世界大陰謀』上下2巻、三交社）も刊行される予定と聞いています。

西洋思想の最高水準を独走するアイクのこれらの著作は、西洋渡来の悪神を超克しなければならぬ我々日本人が熟読消化すべき必読文献です。

船井さんを初めとし、読者諸兄の皆様も是非、お読みいただきたい。

平成19年（2007年）8月24日

太田 龍

文庫版序文 なぜいまデーヴィッド・アイクなのか!? 3

はじめに 太田 龍 24

第1章 神のシナリオと支配者のシナリオ

地球人は異星人に支配されている? —— 日本人の役割は?

41

宇宙文明と地球の未来について 42

デーヴィッド・アイクの「爬虫類人」はちゅうるいじんとはなにか? 42

地球の文明を宇宙的な次元で捉え直したアイクの慧眼^{けいがん}

46

実際にレプティリアンのものを見たグラハム・ハンコック

48

無数の知的文明の存在を知らせる東洋の英知

50

地球の危機を唱えだした英国の科学者たち

50

『法華経』には宇宙の生成論理が書かれている

53

「異星人」の先を見ようとしていない西洋人の限界

56

創造の科学と破壊の科学の違い

57

自然には「創造」のエネルギーと「破壊」のエネルギーとの二つがある

57

いまこそ「逆産業革命」を起すとき

60

2回の不思議体験からわかったこと

62

『日月神示』が予言する日本の立て直し

67

日本の立て直しを予言する『日月神示』の役割

67

2011年から、日本の方向が変わる

69

間もなく日本は「みろく(五六七)」の時代に入る

70

「○」に「、」を入れる使命

73

第2章

西洋に破壊された日本型文明の復活

『カタカムナ』『古事記』『日月神示』が明かす日本の言霊

79

危難の舵なじを変える日本人の知恵 80

シャーマニズムとは宇宙・万物万象との調和、一体、共鳴、共感 80

地球の歴史を物理学的な運動の視点から解明した科学者 81

天武天皇の「殺生肉食禁断の詔勅」は21世紀以降の文明のテーゼ 83

『カタカムナ』が説く日本人の特殊性 86

檜崎ならざき皐月さつきの「イヤシロチ」と「ケガレチ」の研究 86

大和朝廷以前に住んでいたカタカムナ人 90

「YAP」という特殊な遺伝子を持つ日本人 92

『カタカムナ』の「潜象」という概念は素粒子論にあてはまる 93

1万3千年前に洞窟の絵がが消えたのはなぜか？ 98

日本人だけが持っている「言霊」の不思議 100

- 七沢賢治氏の「数霊とコトバ」について 100
- 「五十神マンダラ」と「五十音マンダラ」図 103
- 言霊とは人類の祖先が最初に発した感嘆感動の言葉 107
- 「父音」とは、あらゆる生命を生み出そうとする「聖なる意志」 108
- 正しい大和言葉を崩壊させた闇の権力** 111
- 天武天皇が決めた日本の五つの国策と制度 111
- 『古事記』上巻には宇宙創造の生成過程が書かれている 115
- 日本語の母語の崩壊の背後にあるイルミナティとタヴィストック研究所
なぜ、『聖書』から異星人に関する記述が削除されたのか 120
- イルミナティもフリーメーソンも力をなくしている 120
- テレンス・マッケナの「2012年12月22日」の意味すること 123
- 西洋とは文明人に成り損なったウィルスの存在** 128
- ダーウインの「進化論」は間違っている 128
- 無生物から生物が発生したことを説かないダーウイン「進化論」の限界 130
- 文明の生成発展過程を明かす「易経」と「老子」「莊子」 134

文明の悟りを開き損なった人が野蛮、西洋人 136

第3章

2015年には資本主義が完全に姿を消す

ロスチャイルドとロツクフェラーに操られた資本主義の限界

139

2015年には資本主義は崩壊する？ 140

「ムダ・ムラ・ムリ」の原理でつくられた資本主義 140

資本主義はヴァーチヤル・リアリティであり、魔術の一種 142

資本主義と共産主義は両建て作戦 144

資本主義の後に来るのは「本物主義」 146

本物主義は自然の摂理にさからわない 146

小泉構造改革は「短所是正」の改革だった 148

資本主義の景気循環と波動は同じ 150

資本主義の貨幣制度は是正される？ 151

FRBの欺瞞を暴いた次期大統領候補ロン・ポール 151

「NESARA」(国民経済安全保障改革法)は論理的に無理がある 156

日本はアメリカと中国に共同占領される 157

次期米国大統領と日本の首相は誰か 158

イルミナティにつくられる次の米国大統領 158

ポスト安倍政権は福田康夫か石原慎太郎か? 159

三井財閥と三菱財閥について——行きつく先はキャッシュレス社会 161

ロスチャイルドとロックフェラーは早晩、いらなくなる 164

第4章 ユダヤから目を逸^そらしては世界の動きを語れない——太田龍

日本人が知らない「闇の権力者」の構造と正体を暴く

167

日本人がまったく知らされていない西洋史における六つの秘密 168

①キリスト教はユダヤがでっち上げたもの。キリスト教とユダヤ教の対立抗争は、ユダヤ

による演出 168

②ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの世界宗教は、イルミナティの人類支配のため

の道具としてつくられた 169

③ヴェネチアの「黒い貴族」は、世界支配を目指す金融寡頭権力体制 170

●十字軍戦争は、カトリックとイスラムを戦わせる金融寡頭権力の演出 171

●モンゴルを世界帝国にでっち上げたヴェネチアの「黒い貴族」 172

●コロンブスの大航海に情報と戦略と資金を拠出した金融寡頭権力 173

●キリスト教の大分裂、宗教改革の真の目的は「黒い貴族」による世界支配 174

④バビロン→ローマ→ヴェネチア→ロンドンへと変遷したイルミナティの世界首都 175

⑤17世紀にメシアとして登場したサバタイ・ツヴィ 178

⑥世界超国家、金融センターとしてのロンドン・シテイ 180

日本人が知るべきもつとも重要な西洋史の秘密は「ロンドン・シテイ」の真相 182

ロンドン・シテイは世界超国家、事実上の闇の中の世界政府 182

シテイは独立国家であり、英国女王をも支配している 184

シテイの市長は、実際はロスチャイルド家が関与している 185

いま、初めて明かされるロスチャイルド王朝の秘密 187

ロスチャイルド家は19世紀前半、「ユダヤ人の王」「ヨーロッパの皇帝」と呼ばれた 187

ロスチャイルドは、本当にユダヤ人なのか？ ユダヤ教徒なのか？ 188

金融寡頭権力が支配する英国国家の本質は「海賊国家」 192

隠れサバタイ派ユダヤ、隠れフランキストとしてのロスチャイルド家 194

ロスチャイルド家の世界支配の仕方は「ステルス兵器」に似ている 198

ロスチャイルド家は何重もの階層の代理人、エージェントを通じて支配する 200

アメリカに於けるロスチャイルド家の支配の中核はFRB（連邦準備制度理事会） 201

CFR（外交問題評議会）のメンバー約3000人のうち、73%はユダヤ人 203

ロックフェラー家はロスチャイルドのアメリカに於ける代理人、フロントマンに過ぎない 204

船井さんに教えてほしいこと 205

未来は決まっていない——良い未来はつくりうる——船井幸雄

第5章 過去を正しく知ることは必要だ。

ただし過去にとらわれる必要はない

未来は決まっていない。良い未来はつくりうる 208

- ① 大昔、地球上で人類は助け合っていた 210
- ② 人類は、かつて高度な文化を持っていた 211
- ③ 地球には何回も、すべての生物が滅亡するような天変地異や大破壊があった 212
- ④ 「ノアの箱舟伝説」は事実である可能性が高い 213
- ⑤ 一つの大きいなる意志が地球や人類を動かしている 215
- ⑥ 1万2～3千年前、地球に大天変地異があり、人類は原始人から出発し、ようやく現在のようになった 216
- ⑦ いまの地球は地獄星、地球人は不良星人だ 216
- ⑧ 近未来に地球人はまた原始人に戻るか、優良星人になれるかのいまは分岐点 218
- ⑨ 日本人が中心になり、「百匹目の猿現象」を起こせば良い未来をつくれる確率は高い 222
- ⑩ いまから数年内が分岐点の決め手の年。過去を正しく知り、それらを肯定し、
まず有意の人たちで、良い未来づくりの「百匹目の猿現象」を起こそう 224
- ⑪ ポイントは、エゴ、科学、宗教、金銭にとらわれないこと 225

第6章

イルミナティに操られた幕末・維新革命の真相

227

明治天皇はなぜ、南朝系天皇とすり替えられたのか

孝明天皇弑逆事件を無視して維新史は語れない 228

岩倉具視が手引きし、伊藤博文が長州の忍者を使って暗殺を実行 228

長州藩によってすり替えられた、もう一人の明治天皇 231

明治維新を操った英国とイルミナティ 233

グラバーは薩摩と長州をそのかして徳川幕府を転覆させた 233

いまこそ日本の歴史的正当性を問いたただす時 238

謀略とか策略が通用しない時代が来る 241

シークレット・ガバメントの中枢メンバーは、わずか1万人に過ぎない 244

中国の秘密結社、「青幫」「紅幫」が立ち上がる？ 246

近代史を解く鍵——日本の深層に潜む南北朝問題 250

何重にも振られて展開していく南北朝の問題 250

北朝系の明治天皇が、なぜ「南朝正統論」を唱えたのか 252

イルミナティに徹底利用された長州藩の正体 255

諜報と謀略活動で大きくなった長州勢力 255

西郷隆盛は明治天皇すり替え事件を知っていた 258

西郷隆盛はイルミナティから危険視されていた 260

誤った明治維新も大いなるシナリオだった 264

ザビエルの布教以来、日本はイルミナティの最終破壊目標 266

日本を徹底的に調べ尽くし、支配の戦略を立てたザビエル 266

イエズス会はヴェネチアの「黒い貴族」によってつくられた 268

「民主党の破壊」がイルミナティのこれからの仕事 270

「イシャ」(世界権力)の悪の力を良いほうに活用しなければならぬ 271

おわりに 船井幸雄 274

第1章

神のシナリオと支配者のシナリオ

地球人は異星人に支配されている？——日本人の役割は？

宇宙文明と地球の未来について

デーヴィッド・アイクの「爬虫類人」はちゆうるいじんとはなにか？

船井 私は永年、世の中の構造の研究をしていたのですが、世の中のできごとというのは、過去にはなにかであろうと、またどんなことがあっても、すべて「必然、必要」になるのだと思うようになりました。また世の中のすべてはマクロには生成発展中で、究極には良くなるようになっていくようです。

私はときどき、自分が創造主というか、サムシング・グレートだったらと考えることにしています。サムシング・グレートとは、遺伝子研究の世界的権威である筑波大の村上和雄名誉教授が言い出した言葉で、「何かわからないが、偉大な存在」という意味です。最近の私は、「世の中のすべての存在の本質は創造主というか、サムシング・グレートの分身であり、本質としては平等な存在だ」と認識するようになりました。創造主の立場から考えれば、すべてのものを成長させ良くしたい。さらには自分も成長し良くなって世の中

全体を成長させ良くしていきたいと思うはずで。そのためにはいくつかの条件があります。

その条件として世の中に起こったことのすべては「必然、必要」ということにしようではないか、全部公平にしようではないか。すべてをわかりやすく、非常に単純にしよう。「波動」で捉えられるようにしよう。また、「相似象^{そうじしやう}」にしようとか、そういう簡単なルールをつくったはずなのです。

ちなみに「相似象」とは、自然の中に存在するものは、人間であれ他の動物であれ、また草も木も石も水も、すべて同じような相似の構造になっているということ。たとえば陰陽は、光があれば影がある、作用があれば反作用があり、この世があればあの世があるというように、すべては表裏をなしてバランスしているということです。自然はこのように単純で均整のとれた構造をしていて、しかも絶えずスパイラルに循環しながら発展しています。うまくできています。

ですから、いままで起こったことを全部、「必然、必要」だと肯定して、そのうえでこれからどうしたらいいか、どう生きるのが正しいかと考えるのが正しいのだというのが私の考え方です。昔起こったことをほじくり返すのも必要ですが、それに対して憤慨^{ふんがい}したり、腹を立てたりするより、肯定したほうがベストだと考えられます。その辺が、私と太田さ

んとの思考法の違いのようにも思います。

私は以前から、太田さんの大ファンで著者や訳書などを読ませていただいておりますが、デーヴィッド・アイクさんの『大いなる秘密』（上巻「爬虫類人」・下巻「世界超黒幕」・三交社刊）を太田さんが監訳されたものがともかく勉強になりました。

それと、人間は本来、地球上に発生した生物ではないような気がしていました。筋力、毛や爪が伸びることなど他の動物と違いすぎる人間は、もともと地球以外のどこか別の星から何かの理由で地球にやってきた生物だとは考えられないでしょうか。それは人間だけが地球にとって自然な存在でなく、変な存在だと思えるからです。最近「人は猿から進化したのではなく、独特の種」だということもわかってきましたね。私は、このような考えを基本に論を進めたいので、よろしく。

太田 「我々地球人は異星人（爬虫類的異星人）に支配されている」というデーヴィッド・アイクの『大いなる秘密』に出てくる、「爬虫類人」（レプティリアン）を要約すると、次のようになります。

①地球原人を操作して家畜人化した異星人は、爬虫類人（レプティリアン）である。

I	異星人 Ⅱ 神（神々）
II	異星人（神々）の代理人 Ⅱ <small>かとう</small> 寡頭権力階級（オリガルキー）
III	<small>ヒューマン キャトル</small> 家畜人（human cattle）化された地球原住民
IV	異星人（神々）の家畜にされていない野生の地球原人 Ⅱ 野の獣として皆殺しにせよ。もしくは家畜人となれ

- ②太古のある時代（おそらく紀元前2000年頃）、爬虫類人は表面から姿を消し、彼らの代理人をして対人類支配管理係たらしめた。
- それがすなわち今日まで続く秘密結社である。
- ③彼ら（爬虫類的異星人とその代理人たる秘密結社）は、地球人類の効率的管理のために、精神的牢獄としての宗教を創作した。「一神教」はその究極の形態である。
- ④英国王室は、現代における爬虫類的異星人とその代理人たちの主力基地である。
- ⑤英国王室を含む秘密結社の中核維持、秘密儀式において、彼らは爬虫類的異星人に変身する、との証言がある。

このことを証明するためにデーヴィッド・アイクは広範囲に資料・証拠・情報を収集し、整理し、分析してみせます。アイクのいう「西洋人」を図式化すると前ページの図のようになります。この図式を日本民族にあてはめるとどうなるか。疑いもなく、我々日本人は、IVの部類に入れられるでしょう。

地球の文明を宇宙的な次元で捉え直したアイクの慧眼^{けいがん}

太田 デーヴィッド・アイクという人を、私は1994、5年に初めて知って、出ている本のほとんどを読み、翻訳を4点ほど出しました。彼は英国では稀^{まれ}に出てくる天才的な人です。英国は非常に階級第一主義的な国家ですから、知識人というのは非常に特権的な存在です。上層階級と中流階級があつて、下のほうは知識とか文化とかにまったく縁がないのです。アイクはそうした下層の出身で、高校時代にサッカーの選手でした。

しかしサッカーで足を痛めて、その後はテレビのキャスターで人気を集めていました。ですからそういうレベルではたいへん有名人ではないでしょうか。アイクは80年代に環境問題に関心を持って、英国のみどりの党から、全国的なスポークスマンになってもらいた



デーヴィッド・アイク (KG photo)。



爬虫類型異星人の一種 (『竜であり蛇であるわれらが神々』より)。

いと言われ、それをしばらくやっているうちに、みどりの党とか環境主義的活動では限界というか、大きな逡巡しゅんじゆんを感じているうちに、ヒーラーといわれる女性霊能者と出会い、共感を得て、まったく別の世界に入ってしまったわけです。

何年かしているうちに著述をはじめました。最初の本は100ページ程度の小さな本でしたが、非常な勢いで独自の知的な世界を構築して4〜500ページの大きな本を出すに至りました。西洋人としては稀に見る、西洋に対する自己批判というか批判的な視点、地球の文明というものを宇宙的な次元で捉え直し、評価するというレベルに達したのです。

英国では、アイクは「イエス・キリスト気取りで変なことを言っている」と、すごく嘲笑ちやうちやうされ、外を歩けないくらいにポイコットされました。そこでアメリカに新しい場を求めました。最近は英国でも、アイクは正しかったのかもしれないという論も起こって、テレビが昨年(2006年)、1時間ほど取材しに来たと、言っていました。

実際にレプティリアン的なものを見たグラハム・ハンコック

船井 私は『神々の指紋』で有名なグラハム・ハンコックさんをよく知っており、彼の研究や思考に注目しているのですが、彼は最近、「アヤワスカという植物幻覚剤を飲むと、

みな異次元に行く。そこで爬虫類人に近いようなものを見る」と言っています。体が人間で、頭が魚であるとか動物であるとか。上半身は人間で、下半身は蛇とかライオンなどというものを見るというのです。それに似た絵が、いまから大体4〜5万年くらい前の地球の洞窟にはいっぱいあるというのです。レプティリアン（爬虫類人）というものももし存在し、地球人と接触したとしたら、その頃が最初ではないだろうかと思います。それに、レプティリアンの宇宙での存在は否定できないですね。

ハンコックさんともアイクさんとも親しい私の友人にエハン・デラヴィ（現J・C・ガブリエル）というペンネームの人がいます。エハン・デラヴィは、『キリストとテンプル騎士団』など多くの日本語の著作がありますが、真理の探検家です。1952年にスコットランドで生まれました。22歳から日本で生活を開始し、日本で15年間、東洋医学と弓道に専念しました。彼は人間の歴史や、世の中の真理について、世界各国を歩き探究しつづけています。1カ月に1度くらい私とは意見を交換します。ときどき、アイクさんの近況も教えてくれます。

昨年（2006年）ハンコックさんを日本に連れて来て、植物幻覚剤「アヤワスカ」を飲んだときの話を公開しましたので、いままで疑問だったことが私のアタマのなかで結びついたのです。エハン・デラヴィとハンコックの共著『人類の発祥、神々の叡智、文

明の創造、すべての起源は「異次元」^{スーパーナチュラ}にあった』（徳間書店刊、ヒカルランドにて再刊行予定）という本は参考になりますよ。

太田 グラハム・ハンコックの新しい本の原題は『スーパーナチュラ』（『異次元の刻印』上下巻、バジリコ刊）ですね。それは、私も読みました。

船井 アイクの爬虫類人説はハンコックの調査・研究と結びつくと思います。常識的に言う、信じられないような内容なのですがアタマから否定はできませんね。

無数の知的文明の存在を知らせる東洋の英知

地球の危機を唱えだした英国の科学者たち

太田 デーヴィッド・アイクの生まれ育った英国というのは旧来の自然科学をつくった国